宮嶋　弘先生の思い出

月　溪　宏

昭和二十四年、夏季文芸講座が開かれるのを知つて、同僚二人を強引に誘つて殊勝に聴講したことがあつた。しかし、性来の横着でノートをとるでなし、パンフレットを保存するでなしの私だから、その時初めてお顔をみた宮嶋先生の演題すらも忘れてしまつている。ただ、講演が始まるや、やたらに耳につくのが、先生の「そこでですな」「……こうこうなんですな」と瀕発される終助詞「な」である。早口の上に、強い関西アクセントで発音される先生の「な」は、常に「なァ」に近く、粘着力のある入念と強い詠嘆とが共存していた。そしてしかも、この「なァ」が聴衆の共感を喚起することなしに、自分だけの世界で、自分に語りかけているような孤独の響きを伴つていたものだつた。

今となつて思えば、こういう孤独というか孤絶というか、先生のような「なァ」を発する人に接した経験はない。年も若く、茶目だつた私は、講演の中味をそつちのけにして、早速、ポケットの手帖に正の字をつくつて、先生の「なァ」を勘定したものだつた。二時間足らずのお話しに、なんと八十七回の「なァ」が発音され、講演終了後、同僚から苦笑の一発を背中にくらつた思い出もなつかしい。演題も忘れ、ノートも残つていないのに、このいたずら書きをした教員手帖が、今だに残つているのは皮肉である。だが、この時が私の先生との出合いなのである。

二十五年、私は文学部に編入し、奇しくも先生の謦咳に接することになつた。怠惰な生徒であつたが、先生の授業は割り合いサボらなかつたように思う。黒板にいきなり「春すぎて――」の万葉歌を書かれ、成分分解をせよと指名され、教壇でドギマギした思い出も今はなつかしい。論文審査の時、私が部屋へ足を踏み入れるなり「君は学問と科学の違いをどう思うのか」とやられ、目を白黒させたこともある。とにかく、先生は暴れ馬のような私を調教する術を心得ておられたようである。私は、先生の飛躍の多い、啓示的な御発言にすつかり鼻づらをつかまれ、ひきずりまわされて四年の月日を過したわけだ。

二十七年に入つた大学院を仕事の都合で中断し、三十年に再び顔を出した時、教室へ入つてこられた先生が私を見付けられなり、「一人では勉強できんかな」とニッと笑われた、あの温顔を、私は忘れない。

「ベルグソンを読むんですな。」――五条坂の御宅で、和服姿も細やかであつた先生のお言葉は今だに私の重荷となつて残つている。大学院をはなれてからも、実は、私はまだベルグソンを理解できないでいる。一体、私がやろうとした言語の学的方法論の基礎的理論にベルグソンがどういう影を落すというのであろうか。「まだ、わからんでしような」地下で、先生はきつと笑つておいでになるに違いない。まことに無念なことである。合掌。

（三三年大学院修了、紫野高校）

「韻鏡」のことなど

真　鍋　昌　弘

〃韻鏡〃をとりあげてお話し下さつたのがおとどし、そして三十七年度はずつとおやすみになり、今年の四月から〃懐風藻〃の話をはじめられていました。お元気になられてい

た御様子で、時間よりはやいめに来られ、向いの部屋で弁当をたべておられるのが、たびたびで、教室へは〃わらぞうり〃をはいておいでになることもありました。畑ちがいといゝますか、歌謡の方面をやつています私などのようなものは、先生のお話しをおききしてもすべて本当に理解するところまで、とうていついてゆけなかつたようですが、それでも興味あるお話しでした。〃韻鏡〃をずつと順にお話しになつたところなども、色々と先生の御意見、御説を知ることができました。その二・三を、結論だけあげてみますと、

「内転第五合、喉音の清濁にある〃為〃の字を、万葉集では、たとえば〃乎為里〃（……春去奴礼婆　山辺爾波　花咲乎為里　河湍爾波　年魚小狭走云々→四七五番など）とあるのを〃烏〃の字と誤つたのではないかとするのはよくない。古い音、つまり周代のものに帰らねばならない。〃韻鏡〃より古い韻を知つている日本人が〃為〃を〃ヲ〃として発音したのであろうか。有坂秀世氏の説は、ib〉ie〉iとするのであるが、それはむしろ、ib→iφ→ieと変化してゆくのであつて、つまり、中間に、φの入る過程があるとみなければならないということ。そこで為はiwφであること。」

「外転第十五開にある〃祭〃の字は、カールグレンによるとiæiであるが、そうではなくiɨiにすべきであること。」

「広韻を見ていたであろう韻鏡の著者が、韻鏡の原本に新らしい字を加えたことのあつたのも想像される。それを具体的に見ることは少いようであるが、第十七開、喉音、濁、にあらわれる『麸』の字などがそれであること。」

「韻鏡の著者は、その書に何の注解も説明も加えていない。しかしそこには、大きな意図と大系がかくされていて、著者はわざと何も語らない。じつとながめて、考えて、やがて悟ることを期待していたのか。」

などといつたことを御話しになつたように記憶する。ノートの方ももつと色々書いておけばよかつたとおもわれます。

病弱でいらつしやつた先生は、それでも大学院生のもつた新年会なる小さい集りにも出てくださいました。はやいめに帰られましたが、ひどい吹き降りの日でした。それから数日後、あの雨で自動車はひろえず、えらいめにあつた。あんなのははじめてである。といつた旨のことを私におつしやつたことがありました。たいへん申し分けなく思いました。車を拾つてさしあげるべきだつたのです。日ごろ雑談の中で、自分はさびしいといつたようなことをときどきおつしやつていましたので、なおさらです。

韻鏡を中心とする研究がもうほとんどまとまつたものになりかけているので、もう少し手を加えて、どこかの雑誌に発表しようと思うのだがというようなこともおつしやつていました。ぬくいのは体によくないと言われていましたが、今年の夏は気候が不順だつたのもいけなかつたようです。もつと研究していただきたかつたと思われます。

（本学大学院在学中）

宮嶋　弘先生をおもう

水田　潤

昭和二十二年、私が立命館大学を受験したとき、最初にお目にかかつたのが宮嶋先生である。口答試問の担当が先生であつた。もちろんそれが宮嶋先生であつたと知つたのは、